

歴史を歩く ⑧

町文化財紹介コーナー

「神領10号墳」



くびれ部分で発見された須恵器の土器群



▲くびれ部分で発見された祭祀用の土器群

神領10号墳

昨年の夏、鹿児島大学総合研究博物館の橋本達也准教授らによる神領10号墳の発掘調査が行われ、この時の調査で「武人埴輪」という形象埴輪が出土し、世間をにぎわせた。

あれから1年を経て、再び橋本達也准教授らによる2次調査が8月中旬から9月下旬に行われた。今回の調査は、前方後円墳の主体部である後円部の墳頂の調査と、前方部と後円部の境目にあたる「くびれ部」の2箇所为重点が置かれた。

主体部とくびれ部は古墳の中でも、最も情報量が多いと言われている場所である。主体部は遺体の埋葬施設がある場所であり、当然ながら被葬者の情報が残されている可能性がある。そして、くびれ部分は、祭祀を行う空間として活用されていることが多いため、祭祀用に用いられた土器が多く出土する場所である。

主体部については、すでに後世の人々によって、荒らされていることが分かっていた。しかし、荒らされていても、何らかの情報は残存している可能性がある。実際、今回の調査で、散乱している軽石礫群を取り除いていくと、凝灰岩製とみられる石棺の蓋が顔をのぞかせた。壊された蓋の一部は、ちょうどその先端部分であり、裏返しの状態で出土した。石をくりぬいて造られていることから、「舟形石棺」と呼ばれる石棺と考えられる。

もう一部は、石棺の蓋の側面に「縄かけ突起」という突起が施されていた。「縄かけ突起」は、有力者でも、大型前方後円墳の被葬者クラスの墓には見られるが、大型前方後円墳に継ぐ中級クラスの古墳で発見されるのは珍しい。石材として採用されている凝灰岩は大方か、宮崎産の可能性もある。とすれば、わざわざ遠方から棺を運んだわけだ。ちなみに推定で石棺は幅1m、長さは2mを超える大型の石棺と考えられる。

くびれ部分でも、大きな成果があった。愛媛県松山平野南部にある市場南組窯で製作された5世紀前半の初期須恵器が出土した。

須恵器は、5世紀前半に朝鮮半島から伝わった製法で作られた土器で、登り窯を用いて高温で焼成した技術を用いて作る。初期の須恵器は全国的にも出土例は少ないという。

須恵器は、皿に脚台のついた「高杯」や、ほかにお酒などを注ぐために使われる「ハソウ」、器を載せるための「器台」、「壺」、「甕」など様々な種類の土器が多く出土している。全国でも稀

なケースである。

武人埴輪の出土によって、神領10号墳を構築した有力者も、横瀬古墳と同様に近畿との直接的な交流があったことがわかった。しかし、神領10号墳の被葬者は、近畿だけでなく、東九州・瀬戸内地方など広域間交流を積極的に行っていたようだ。

このような成果は大隅地域に多くの古墳群ある中でも特異であるという。横瀬古墳・神領古墳群に眠る王たちは、日本列島の南端にありながら、時代の最先端の情報を持っていたのだ。

【大崎町埋蔵文化財専門員 内村憲和】



▲円墳頂上で発見された石棺の蓋